

# Daydream



PARALLEL ACT



# Daydream

これは『終末なにしてますか？ 忙しいですか？ 救ってもらっていいですか？』の二次創作小説本です。

月に嘆く最初の獣シヤンセントが作り出した五百年前の世界に、ヴィレムとネフレンだけでなく、クトリまで取り込まれてしまった場合にどうなるか？ を描いています。

メインはヴィレム×クトリですが、ネフレン分も多めです。むしろヒロインです。

はたして彼・彼女らは幸せになれるのか？ でも『すかすか』ですからねえ（笑）

また、最後にクトリとリーリアによるオーディオコメンタリーもあるので、そちらもお楽しみ下さい。

# Daydream

## もくじ

眠れる養育院の美少女 .....	7
夢のような日々 .....	29
帰還 .....	65
巣喰ってもらっていいですか? .....	101
あとがき .....	117

イラスト／ヘルニア忍者  
デザイン／TomOne

眠れる養育院の美少女

「……さん。おとーさん。起きて、おとーさん」

「……」

懐かしい声で意識が戻る。この声を最後に聞いたのは何年前だったろうか？ 頭が働いてくると従って、声の主を思い出す。もう二度と聞けないはずの声。それが聞こえている。

ああ、夢か……

だが、身体へのリアルな圧迫感が夢でない事を悟らせる。

身体を起こすと、

「痛い……」

上に乗っていた誰かが転がり落ちて、抗議の声を上げた。こちらはいつもの声。何年も前なんて事はなく、つい数日前にも聞いた。この抗議は何度目だろうか？

「いきなり身体を起こすと落ちる。ヴェレムはいい加減学習すべき」

「いや、まず人の上で寝るなど言ってるだろ」

何度言っても聞きやしない。

「良かった。元気そうで。クトリさんが心配なのはわかるけど、ちゃんと休まないと駄目よ」

「何？」



目の前にあるのは懐かしい顔。アルマリア・デュフナー。五百年前に死んだ筈の〈娘〉がそこにいた。

そんな馬鹿な!?

頭の中に疑問が湧く。そしてさっきアルマリアが言った「クトリさん」……部屋を見渡すと、ベッドに赤髪の少女が眠っていた。

よろよるとソファから立ち上がると、ゆっくりと近づいていく。恐る恐る顔を覗き込む。間違いない。

「クト、リ……」

〈獣〉との戦いでボロボロになり、力尽き果てようとしていた筈の少女が眠っていた。

2

『食事持ってきた』

『そこに置いててくれ』

『そう言ってまた食べないつもり？ 体力持たないし、作ったアルマリアが可哀想』

『そうだな。それは悪いな』

見つめていたクトリの寝顔から離れて、机に向かう。ネフレンが持ってきてくれた食事が置

いてある。懐かしいメニュー。ヴィレムの好物が並んでいる。アルマリアがヴィレムを心配して作ってくれたのがわかる。

『クトリが心配なのは私も同じ。でも、ヴィレムも心配』  
『すまない』

管理者失格だな。

パンをちぎって、スープに付けて口に運ぶ。美味い。それに懐かしい味だ。何年も食べてなかった、もう二度と食べられない筈の味。それをなぜか食べている。

『ヴィレム、ここはどこ？』

『ゴマグ市外れにあるフォーリナー養育院。俺の故郷だ』

『ヴィレムの故郷って、地上？』

『そうだ』

『じゃあ、ここは地上？』

『そうだ』

『滅んだんじゃないの？』

『そうだ。お前も見ただろ。あの廃墟』

『それがここ？ でもここは……』

『ちゃんと家が建ってるな』

そうだ。

ヴィレムは地上に降り立ち、五百年ですっかり廃墟となったゴマグ市を歩いた。そこには土台だけになった養育院の跡もあった。

だが、ここはなんだ。ちゃんと家が建っている。それだけじゃない。アルマリアがいる。子供達もいる。五百年前に死んだ筈の奴らが生きている。五百年前と言っても、ヴィレムの記憶だと二年前に別れたばかりだが、その記憶のままの彼女らが生きて暮らしている。

『人間族は滅んだんじゃないの？』

『その筈だったんだがな。それに滅んでなくても、アル達がいる筈がない。俺達はこんなに長生きじゃない』

『ヴィレムは生きてる』

『俺は氷漬けになってた』

黒燭イーボンキヤンドル 公を倒して、五百年氷漬けになった。解凍されたのはつい二年前だ。

『じゃあ、あの人達は何？』

『わからん。可能性あるとすれば、悪魔が見せてる夢だな』

『夢』

『そう、心地の良い夢を見せ、夢の世界の住人にし、精神を喰らう。俺も昔色スケクブス悪魔に捕らわれ、戦った事がある』

『どんな戦いだったの？』

『それは……』

子供に聞かせる話じゃないと思い、説明を止めた。仮にネフレンが子供じゃなくても、恥ずかしくて聞かせられない。

『それはともかく、俺達に幸せな夢を見せ、精神を喰らうつもりなんだろう。どうにか打ち勝つて、夢の世界から脱出しないと』

『ヴィレムの夢なら、どうして私がいるの？ 私の夢なら、どうしてヴィレムがいるの？ それにクトリも』

『あいつら、二・三人まとめて引きずり込むなんてお手のもんだ』

『でも、抜け出して良いの？』

『何言ってるんだ？ 喰われないのか？』

『……見て』

ネフレンは立ち上がると、いつも着ているローブを脱ぎ、下着姿になった。

『ここ、〈深く潜む六番目の獣〉にやられて傷を負った』

左前腕や右上腕を指差すが、そこは綺麗で痣すらもない。

『ここも、ここも。そのまま死ぬか、妖精郷の門を開いて死ぬのは時間の問題だった』

ヴィレムも自分の上着を脱いで確認してみる。古傷はあるが、新しい傷が一つもない。どこ

も痛くない。ヴィレムの身体はボロボロになっていて、何もしてなくても痛みが響いていたが、それも無くなっている。

ベッドに歩み寄り毛布を捲ると、下着姿のクトリが横たわっている。息もほとんどしてないし、体温も低く、死んでるかのように無表情だが、生きている。腕には何の外傷も見当たらない。肩を捲ってみるが、そこにも何も無い。確かにそこを触手に突かれた筈なのに。

『夢が覚めたら、私達はきつと直ぐ死ぬ。この無傷の状態で目覚めるとは思えない』

『けどな……』

ネフレンが言うように、夢の中でも生きた方が幸せなのかもしれない。最終的に悪魔に喰われるとしても、おそらく苦痛はなく、安らかに喰われるだろう。夢から覚めても、壮絶な死が待っただけだ。

だが……

じつとクトリの顔を見る。

死んではいないが、生きてるとも言えない状態。ヴィレム達を喰うのに、なぜクトリをこんな状態にしてるのか。傷を治すなら、クトリも目覚めさせておいて欲しかった。身体の状態は操作できても、精神の操作はできないのか？

もしクトリが起きて笑いかけてくれたら……悪魔に逆らって現実に戻れるだろうか？ このまま現実に戻ったら、クトリはそのまま、眠ったまま死ぬ。もし起きたら、クトリの笑顔は再

び苦痛に歪み、悶え苦しみながら死ぬのだ。

「おとーさん、ネフレンさん。ご飯食べ終わった？」

アルマリアが食器を取りに来た。

「何やってるの!? おとーさん!!」

「ん?」

今の状況を確認する。眠っている少女の下着を捲って、その姿を鑑賞している男……

「ま、待て! アル! これはクトリの傷を確認してただけだ!」

「そー言うことはネフレンさんにやってもらえば良いでしょう!」

「いや、ここは自分でも確認しないと!」

「駄目ですっ!」

「レン、助けてくれっ!」

エムネットワイト  
人間族の帝国語から、大陸間公用語に切り替えて助けを求める。

「ん。傷がないか確認するだけなら、腕を見るだけで十分だった」

「いや、それは不十分だろ」

身体もぐざぐざと触手に突かれていたのに。

『アルマリア。ヴィレムはやましい気持ちは全くない。そんな甲斐性あったらクトリはもつと幸せだった』

裏切られたかと思ったが、ちゃんと弁護してくれた。良かった。

「何言ってるかわからない」

そうだった。アルマリアは大陸間公用語はわからない。

「ともかく、おとーさんは出て行きなさい！」

こうなった女は言うこと聞きやしない。この部屋は退散するしかなかった。

3

「うおっ!？」

目を開けると、視界いっぱい顔が在った。反射的に声を上げ身体を起こす。

状況を確認する。ヴィレムはクトリのベッドに突っ伏して寝ていた。そのヴィレムに向かい合う形でネフレンが吐息を立てていた。

クトリをずっと眺めていた事までは覚えている。それでいつの間にか眠ってしまった。そこにネフレンがくつついてきたのだろう。

起きている時は背中にくつついてくるが、寝てると前にくつついてくるんだな、こいつ。

ネフレンは気持ちよさそうに眠っている。しっかりと生きているのがわかる。

クトリは目を覚ますのだろうか？ このまま眠り続けるのだろうか？ ナイグラードは言っ

ていた。精神崩壊した黄金妖精レフラカインが意識を取り戻したのは奇跡だと。初めての事例だと。

だとすると、再びクトリが目を覚ます可能性は低い。目を覚まさないクトリをじっと見続けることになる。捉えている悪魔は何をしたいのだ？ 苦しみを喰らうのが目的なのか？ ならなんで五百年前の、ヴィレムの故郷という舞台設定にした？ 矛盾している。クトリが目を覚ます方法はあるのか？ あるならば何でもするのにな。

「ん……？」

ネフレンの目が開いた。目を擦りながら身体を起こす。

「おはよ……おはよう、ヴィレム」

途中で大陸間公用語を帝国語に改めて言い直した。

寝ぼけて思わず母語が出たんだろうが、律儀な奴だ。

「おはよう。なんで俺の前で寝てた？」

「ヴィレムが壊れそうだから。側にいるのが私の使命」

大陸間公用語はあっさりとなげきされ、帝国語で答えられた。

だが、微妙に答えになつてない。まだ帝国語に不慣れだからか？

側にいるだけなら背中ですら十分な筈だ。前にいられると、むしろ驚きで心臓が壊れそうだ。

「今度からは驚かさないうような場所で寝てくれ」

「ん。善処する」



もう大丈夫だろう。ネフレンは時たま突拍子のないことをするが、言われたことは守る子だ。

「クトリの様子はどうか？」

「見ての通りだ。目を覚ます気配はない」

ネフレンはクトリの寝顔を一瞥し、こちらを見た。

「ヴィレムは相当疲れてる。少し休んだ方が良い」

「いや、でも……」

「クトリは私の親友。私にも看病する権利と義務がある」

「そうか、そうだな」

クトリとネフレンは、ヴィレムなんかよりもずっと長く過ごした親友。心配していない筈がない。

「これからは二人で看病する」

「わかった。俺は休むよ」

クトリの寝顔を眺める。相変わらぬ冷たい寝顔。

ヴィレムの背中を背もたれ替わりに、ネフレンが本を読んでいる。

ネフレンも加わって看病しているが、完全に交代交代と言うわけではなく、一緒にいる時間も

多い。彼女の場合結局本を読んでいるので、精神の負担は変わらないのだろう。

それよりも、一人でクトリを見つめて消耗するヴィレムの支えになってくれている方が大きい。一人だとのめり込み、自分を追い詰めてしまうが、ネフレンが側にいるとそれが和らぐ。真の意図はこれだったのだろう。

「ヴィレム、この本に悪魔の記述がある」

「む」

最近ネフレンは市民図書館から本を借りてきて読んでる。元々読書家だった彼女は、未知の本だらけの図書館を堪能しているようだ。

ここがヴィレムの記憶を元にして構築された世界なら、図書館の本と言えども俺の知識の範疇の筈だ。だが、ヴィレムの知らない知識の本が沢山ある。しかし、それは当時本当に存在した本なのか、全くのでまかせの内容が書いてあるのか、ヴィレムには判断できない。

「色悪魔<sup>スクラッス</sup>、捉えた者に性的な夢を見せ、快楽を……」

「あ~~~~あ~~~~！ それ以上言うの止めような」

「ヴィレムは直接戦ったって言ってた。どんな戦いだったか、詳しく教えて欲しい」

「その本に詳しく書いてあるだろ」

「本の知識だけじゃ不十分。実際に戦った人の言葉は重みがある」

「そうは言ってもだな。あれはお前にはまだ早い」

スケップス 色悪魔が見せる夢は子供に話す内容じゃない。男子ならともかく女の子には話しづらい。

「むう。私は成体<sup>レ</sup>妖精。もう大人。それに、ヴィレムが戦ったのは何歳の時？」

痛い所突いて来やがる。

妖精の成体<sup>レ</sup>ってのは戦う準備ができたってだけだ。決して性的な意味での成熟を意味しない。が、戦えるって事は世間では大人とみなされる。それに……

「十四歳」

「私と一つしか変わらない」

そう、ヴィレムは準<sup>クァン</sup>勇者<sup>ブレイヤ</sup>としてもっと小さい頃から戦っていた。そこら辺の普通の兵士と比べても段違いに強く、大人として扱われた。そのさなかで色悪魔<sup>スケップス</sup>と戦った。沢山の裸の女性が迫って来る夢に、思春期真っ盛りのヴィレムはまんまと取り込まれそうになった。どうにか撃退した後も、暫く同僚の女性陣をまともに見られなかった。それでめっちゃくちゃからかわれた。

「なら、検証してみる」

「？」

何か変なことを言ったと思ったら、背中から感触が消えた。立ち上がったのか。続いて衣擦れの音が聞こえる。

何をやってるんだ？ まさか。

振り向くと、いつも着ているケープはとつくに脱ぎ捨て、下のワンピースを脱いでる所だった。

「何やってんだ、お前」

「お兄ちゃん、もう我慢できない。私を女にして」

「……」

ワンピースを脱ぎ終わり、下着姿になって問いかけてくる。棒読みで。

基本的に白の無地なのだが、少しだけリボンが付いていたりする可愛いスリッパ。いかにも子供の下着という感じだ。

「興奮する？」

「いや、全然」

子供に迫られてもな。ネフレンなら風呂にだって入れてやれる。

「それ、どこで覚えた？」

「図書館の本」

さすが市民図書館、色んな本があるな。

「色気、無い？」

「無いな」

不安げに訊くなよ。

「乳の、所為？」

「何言ってるんだ？」

「ヴィレムも乳が大きい方が好き？」

「だから何言ってるんだ!？」

ぺたぺたと自分の胸を触りながら問うてくる。

「乳なんてただの肉塊なのに。そんなに肉塊が好き？」

「そういうことじゃねえよ！」

「むう……ラーンには興奮してたのに」

「あいつもそんなに乳ねえだろ」

身体はあいつも貧相なんだが、妙に色気あつたな。声か。雰囲気か。

「じゃあ、何に興奮してたの？」

「それは……声とか」

「あは〜ん」

「……そうじゃねえよ」

だから棒読みで言われても色気なんか感じない。

「冗談はこれくらいにして」

「冗談だったのか！」

一歩間違うとシャレにならない冗談は止めて欲しい。

「クトリを起こす方法考えてみた」

「そんな方法があるのか？」

今までクトリ以外精神崩壊から目覚めた例がない。そのクトリが目覚めた時の理由もわからない。つまり起こす方法なんてわからない筈じゃなかったのか。

「わからない。だから試す」

「なるほど」

方法がわからないから、試せる奴を試すと言うことか。

「王子様のキス」

「ん？」

「眠り姫は、王子様のキスで目覚めるのが昔からの定番」

「それ、どこで読んだ？」

「妖精倉庫の図書室」

戻れたら蔵書を精査だな。

「でも、何もしないよりは良い。好きな人からキスされると、それで魂が引き寄せられるかもしれない」

ロマンチストの考えだ。だけどロマンチストだったクトリならあり得るかもしれない。

「やって、見るか」

「さあ、ぶちゅーっと」

「その言い方、萎えるんだが」

「私のことは気にしないで」

「……それより、お前いつまでその格好なんだ？」

まだ下着のままだ。

「ヴィレムは私の下着じゃ興奮しない。なら問題無いはず」

「それはそうなんだけどよ」

アルマリアに見られたらまた誤解されそうだ。

それはともかく、クトリを見る。今のやりとりでも全く表情は変わらない。冷たいままだ。腰を浮かせ、顔をクトリの顔に近づける。

4

暗い廃墟を少女が一人歩いていた。寂しい場所。誰もいない。

いつの間にか天井が低くなってる。周りの壁が人工的に加工された物から、自然な物に変わってきた。廃墟と言うより洞窟？

少女の前に淡い明かりが見えた。近づくと、鮮やかな赤髪の小さな女の子が氷漬けになっている。胸にはぱっくりと開いた大きな傷。白くて可愛らしいワンピースなのに、胸の辺りは赤黒く染まっているのが痛ましい。

——この娘、見たことあるような……ないような……

『おかえり。がんばったね』

振り向くと、鮮やかな赤髪の娘が微笑みかけてきた。歳は自分よりも少し上くらい。髪の色も顔も氷漬けの娘に似ている。何度か会ったことあるような気がする。

——頑張ったって、何を？ それにここ、帰る場所だったっけ？  
違う気がする。

『そうだよ。だつて、くとりはわたしだもの』

——私が君？

『そう。わたしから生まれたんだから』

——エルク？

ふつと名前が浮かんだ。

『うん』

肯定が返ってきた。少し思い出した。

——君、こんなに大きかったっけ？



もっと小さな、そう、氷漬けの娘と同じ位だった気がする。

『ここ、長いから。少し大きくなったの。くとりよりも大きくなったでしょ』  
そう言っつてにつこりと微笑む。

『たくさんの夢を見て、たくさんの人達と暮らしてきたの』  
誰とだろう？ この洞窟にそんなに大勢の人が住んでるとは思えない。

『くとりも暮らしてみる？』

——え？ ここに？

『ううん。みんながいる世界』

——みんなって？

『みんなはみんな。たくさんひとがいるよ。たくさんがんばったごほうび』  
そんなに何かしたかな？

——あ……

疑問に思った直後に、沢山の〈獣〉を倒した記憶がよみがえる。精一杯戦って、ヴィレムやネフレンを守った記憶が。他にも、沢山の想い出が。

唇が触れる寸前、気配を眼前に感じた。想定外の気配が反射的に身体を引かせる。視野が広がり、クトリの顔の様子がはっきりとわかる。

わずかに目を開け、ほんの少しだけ生気が戻っていた。仮面のような無表情から、微笑みに変わっている。

「……………」

声にならない。感情が湧き上がってくるのに声が出ない。

『ただいま…………』

か細い。だが、紛れもなくクトリの声だ。

『クト…リ…………』

『ヴェレム…………』

『おか…えり…………』

『うん』

ようやく声を絞り出せた。

『また、会えるなんて…………目覚めるなんて…………』

もちろん目覚めると思っただけ病してた。だけれども、もう目覚めないという恐怖もあった。

仲間にも何人かいた。戦闘で負傷した後、目覚めないまま息を引き取った奴らが。

『無茶、しゃがつて……』

『だつて無茶する人がいたから』

ああ、そうだ。無茶をした。瀕死の状態で戦つて、皆を助けようとした。空の上から降下して、ネフレンを助けようとした。普通なら何度も死んでる。

こいつも無茶をした。何百匹もの〈獣〉と一人で戦つた。普通なら死んでる。

『奇跡……二度目。それとも夢だから？』

眩いたネフレンにクトリは顔を向ける。親友との再会。

大陸間公用語なのは驚きで素が出たのか、クトリに聞かせるためか。

『レン……なんで下着なの？』

微笑みがじと目に変わった。

『気にしないで。ヴィレムも気にしなかった』

『どういう事？』

睨み先がヴィレムに変わる。

『これはネフレンが勝手にだな』

『レンの所為にする気!? あ……』

少し顔を上げたが、直ぐに枕に下ろす。目眩でもしたのか。ずっと眠り続けていた後なのだ。

目を覚ましただけで、体力は落ちきっているだろう。

『覚えてなさいよ。後、で……』

『眠った』

今度の寝顔は、今までと違って表情がある。血色が良いとは言えないが、休めば良くなるだろう。

『とりあえずレン、服を着ろ』

『わかった』

今度は素直に従った。帝国語への訂正もしない。

『さて、スープでも作っておくか。レン、クトリを見ててくれ』

『ん』

厨房に向かうヴィレム。

すやすやと眠りクトリの髪に、一筋の青い線があった。



五百年前の世界に取り込まれたヴィレムとネフレン。その隣には眠り続けるクトリもいた。二人の看病により、クトリは目を覚ます。

結婚式を挙げるヴィレムとクトリ。しかし、この世界の期限は迫り、人々は〈獣〉へと姿を変え始めた。

とは別に、クトリとリーリアによる楽しいオーディオコメンタリーもあります。